

いばらきシルクロード

栗 林 茂 治

常陸国（現茨城県）は古代に養蚕・織物の先進地であった。養蚕や織物に関わる神社や寺が各地に祀られ、養蚕や機業に因む名

称の地域や河川が多く存在し、伝説が伝承されていることは、かつてこのあたりが養蚕や機業の地であったことを雄弁に物語っている。また県内に我が国で最初の蚕種本場として一世を風靡した史実があることや、今も古来の技法の流れを汲む紬業が繁栄していることなどもそれを裏づけている。また「万葉集」に「筑波嶺の新桑繭の衣はあれど君が御衣しあやに着欲しも」と、筑波と桑・繭・衣とをおりこんで詠われており（写真①）、七、八世紀の昔にすでにこのあたりが養蚕の地であり、良い絹織物の産地だったことを証左して意義深い。

茨城県下における養蚕に関係の深い社寺として、つくば市神郡の「蚕影神社」（写真②）、日立市の「蚕養神社」（写真③）、鹿島郡神栖町の「蚕霊神社」（写真④）と「蚕霊山千手院星福寺」（写真⑤）、結城市の「大桑神社」（写真⑥）、結城郡石下町の「桑原神社」が、また織物の神社として、常陸太田市の「長幡部神社」（写真⑦）、那珂郡瓜連町の「静神社」（写真⑧）、つくば市漆所と小和田の「初西神社」（蚕影神社の左右両方向に位置する場所に同名の二社が所在し、それぞれの近くには赤布または白布をさらしたという伝承のある赤池と白池も現存する）などが祀られている。これ

らの社寺は全国的にも著名で、養蚕・機業の古い信仰がいずれもこの常陸国内から派生していることは注目すべき点である。

このうち「蚕影」「蚕養」「蚕霊」の三神社はいずれも旧称「とうら」という地籍にあり、それぞれが同じ金色姫の伝説、すなわち天竺国（現北インド）の王女の金色姫が流離の果てに欽明天皇の代、日本常陸国の豊浦の湊に流れ着き、権大夫に助けられるが、まもなく亡くなり、蚕に

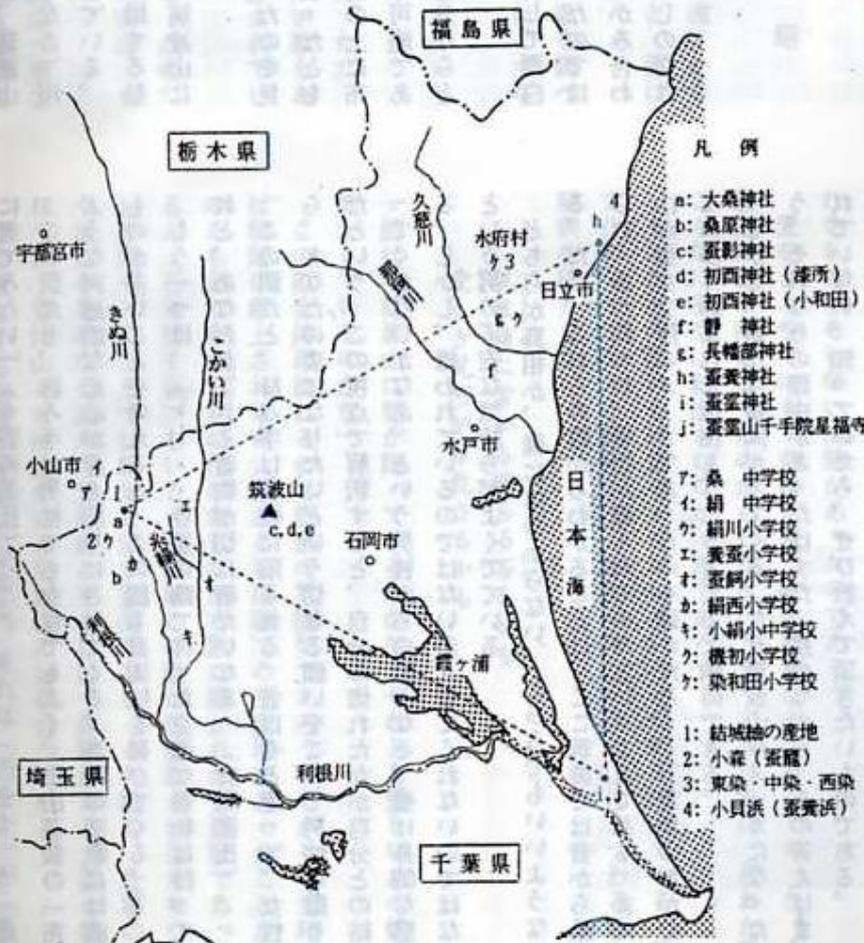


図 いばらきシルクロード地図



(3) 蚕養神社

太平洋を見渡す崖の上にあつて、金色姫が流れついた伝説をしのばせるに足る景観である。これらの神社の位置を地図の上で見ると、蚕養神社と蚕霊神社の二社は東経一四〇度四三分の同経度に位置しており、またこの両神社と蚕影神社の位置を線で結ぶと二等辺三角形となり、蚕養・蚕霊・大桑の三神社の位置を結ぶと正三角形になる(図の点線)。これらは単なる偶然でなく、何か意味がありそうである。



(2) 蚕影神社

蚕養神社は眼下に太古の頃には鹿島浦の波濤がこの山麓にまで打ち寄せていたといひ、豊浦、船の宮、船つなぎ松など、金色姫の渡来(ワタノクミ)の伝説を裏づけるかのような海辺らしい地名が今でも現存している。



(1) 万葉歌碑(つくは市・テクノパーク大穂内に所在)

化身して恩をかえずという悲話を伝承している。蚕影神社のある筑波山麓は今海辺から遠く離れているが、太古の頃には鹿島浦の波濤がこの山麓にまで打ち寄せ

る。古来、常陸国(現茨城県)は、長幡部の^{カサガタ}絶やし織という織物で世に知られていた。第十代崇神天皇の世に、多弓命は久慈太田の郷に機殿を造り、裁ち縫いのない内幡という絶を暗闇の中で織ったという。この史実に因んでこの地はかつて機初村(現在は常陸太田市幡町)と称され、祖神が長幡部神社(写真⑦)に祀られている。これは結城紬をはじめ絶織物の原点になる神社で、機業の祖神と仰がれている。また、久慈郡の静織里(現在の瓜連町静)というところでは倭文命(しづ織(倭文))という色染めの糸で乱れ模様(綾)に織る綾布を教え、これは常陸綾のもとになったといひ、祖神が静神社に祀られている。また機初村で織った反物を染めたところという伝承をもつ地として、元禄郷帳には旧久慈郡に「東染村」、「西染村」、「合染村」、「中染村」が存在したが、村の合併で「染和田村」となった。これが水府村に変わって村名から染の字が消えたが、字名で東染、中染、西染という地名が現存している。その他、地名では養蚕村、蚕飼村、絹川村、桑村、絹村、



(6) 大桑神社



(5) 蚕霊山千手院星福寺



(4) 蚕霊神社



(9) 絹中学校



(8) 桑中学校



(7) 長幡部神社

絹川村、機初村など、養蚕・絹業の地であることを示す村名が、かつて実在した。これらは町村合併で残念ながら名称が変更されてしまったが、僅かに学校名などとして残って昔の地名を偲ばせている。すなわち、小山市に桑中学校（写真⑧）と絹中学校（写真⑨）が、結城市に絹川小学校が、下館市に養蚕小学校（写真⑩）が、結城市千代川村に蚕飼小学校（写真⑪）が、水海道市に絹西小学校が、筑波郡谷和原村に小絹小・中学校が、常陸太田市に機初小学校（写真⑫）が、久慈郡水府村に染和田小学校が現存している。その他の地名で、結城市の小森地区（旧絹川村）はかつて「蚕籠」と記載された。また養蚕神社の神霊が孝霊天皇の五年（二八〇）に降臨したと伝えられる日立市の小貝浜は、かつて「蚕養浜」（写真⑬）といわれ、この浜一帯からとれる美しい小貝は「蚕生貝」（写真⑭）と呼ばれ、蚕室などに祀って豊蚕のお守りにされた。

河川では、糸繰川（写真⑮）が古来同じ名称で関城町から下妻市のあたりを流れているが、この川が合流する小貝川（写真⑯）は大昔に「蚕飼川」と書かれたというし、糸繰川の西側を流れる鬼怒川（写真⑰）はかつて「絹川」と書かれたことがあ

るといふ。名称にあえて絹、糸、蚕を織り込んだほどのこれら河川流域一帯のかつての養蚕や絹業の繁栄ぶりが偲ばれる。このように蚕糸のモニメントが、神社名や地名、河川名、学校名などとして存在し、幾世紀にもわたり残り続けていることは貴重で、人の歴史の重みとして受けとめる必要がある。

文武天皇の大宝三年（七〇三）に、筑波山麓の蚕影神社の近くで蚕種を作り、市場を結城の地に開いていたといひ、これは日本における蚕種業の最古の記録として知られている。蚕種業は近世中期以降、養蚕業からの分化が進行し、次第に地域的に特産化して発達したが、元禄（一八世紀前半）頃におけるその中心地は結城地方であった。二六〇戸余が蚕種業に従事し、すでに分場組織に似た小作養蚕も行われ、広く各地に販売して「結城蚕種本場」の名声をほいままにしてきた。この蚕種製造の興りこそ、結城絹業の発生の母体と考えられる。蚕種製造と軸の結びつきは出穀圃にある。蚕種製造では採種後に副産物として出穀圃が沢山生



(12) 機初小学校



(11) 蚕飼小学校



(10) 養蚕小学校



(15) 糸線川



(14) 蚕生貝



(13) 小貝浜 (蚕養浜)

じる。出設繭は利用の目安がたたなければ廃棄するしかないものであったが、古代より糸を織り、繭糸の利用に長い伝統と経験をもった結城地方の人たちは、これを真綿にして糸を紡ぎ、紬織にすることを考えだした。江戸時代には養蚕上手の農民に蚕種を貸し与え、採種後の出設繭は農民に与える「蚕種小作」の仕組みが発展し、蚕種農民たちは農閑期に出設繭から真綿を作り、紬糸をひいて紬の原糸にした。

ところが寛保二年（一七四二）の鬼怒川大洪水で結城地方の桑園が流されて蚕種製造ができなくなり、止むなくこの地の蚕種製造家たちは奥州信達地方に赴き、切出し種（種繭を購入して製造する蚕種）の生産で急場をしのいだ。これは蚕種製造の中心地を奥州信達地方に移動させる契機となり、やがてその地に「奥州本場蚕種」生産地の地位が確立し、結城蚕種は衰退を余儀なくされた。その後、鬼怒川沿岸は治水されたが、蚕種業は回復することなく、かわって養蚕が定着し、繭の生産が増え、織物にする絹糸や真綿にこと欠くことはなかった。

結城紬は「長幅部紬」の遺法を伝えるものといわれる。古代に久慈地方で発した

織業が桑を求めて次第に南下し、筑波山麓から鬼怒川、小貝川の沿岸に拡がり、結城に定着したのだ。かつて常陸綾織、常陸紬といわれた織物はこうして結城紬となって脚光をあび、「本場結城紬」の商標で全国に知られるようになった。

結城紬の特徴は、煮繭から真綿かけ、糸つむぎ、絹くくり、いざり機による機織り（写真(18)）まで、全て手作業で作られる点と、亀甲拵と十字拵が表現する精緻な美しさにある。結城紬ならではの独特の風合は、古来から伝承した技法を活かしつつ出来る限りの丹精を尽すところから生まれる。この製法によって昭和三十一年には国の重要無形文化財に指定され、昭和五十一年には伝統的工芸品に認定されている。これは単に紬としてだけでなく、名実ともに日本の着物の一頂点である。

結城紬はこの地方の風土と、歴史と伝統が、産み、育て、その永い生命を支えてきたのである。

以上のように、久慈の機初（はたご）から、筑波、結城に至る道筋は、まきれもなく我が国養蚕・機業のふるさとであり、古代のロマンを秘めた「いばらきシルクロード」である。



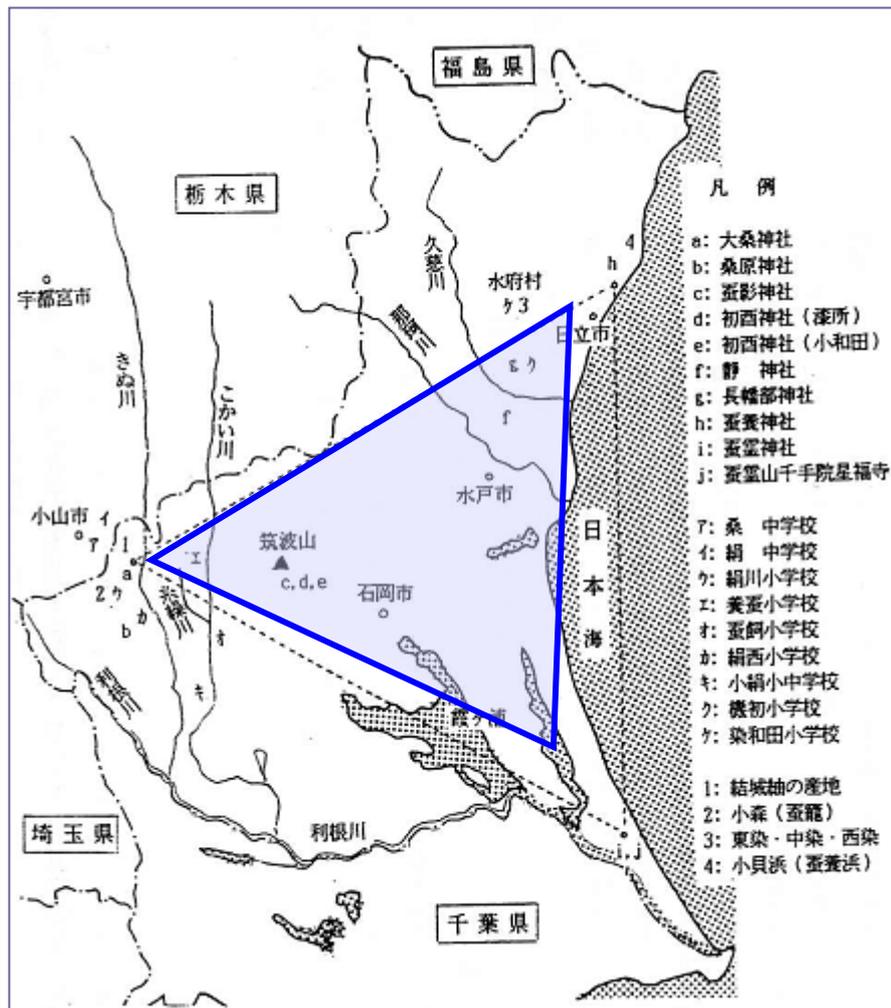
(18) 結城紬の機織（いざり機）



(17) 鬼怒川（絹川）



(16) 小貝川（蚕飼川）



久慈の機初^{はたぞめ}から、筑波、結城に至る道筋は、まぎれもなく我が国養蚕、機業のふるさとであり、古代のロマンを秘めた「いばらきシルクロード」である。名称にあえて絹、糸、蚕を織り込んだほどのこれら河川流域一帯のかつての養蚕や絹業の繁栄ぶりが偲ばれる。



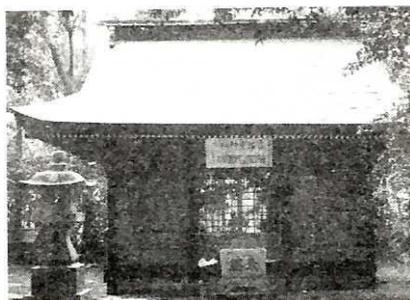
万葉歌碑
(つくばテクノパーク大穂)



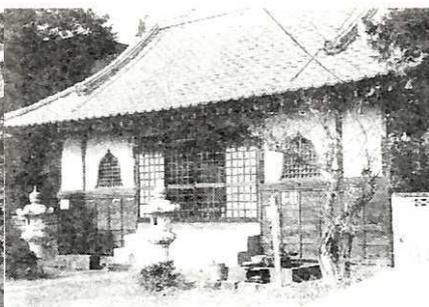
蚕影神社
(つくば市神郡)



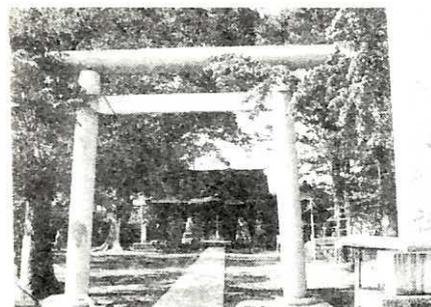
蚕養神社
(日立市)



蚕霊神社
(鹿島郡神栖町)



蚕霊山千手院星福寺
(鹿島郡神栖町)



大桑神社
(結城市)



長幡部神社
(常陸太田市)



桑中学校
(小山市)



絹中学校
(小山市)



養蚕小学校
(下館市)



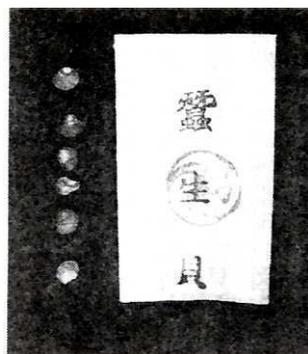
蚕飼小学校
(千代川村)



機初小学校
(常陸太田市)



小貝浜、蚕養浜
(日立市)



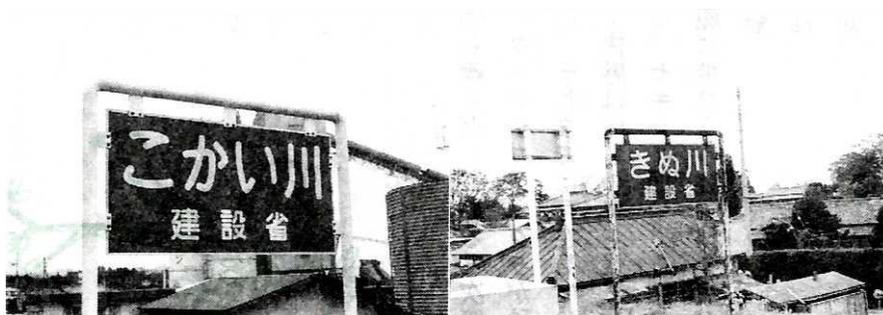
蚕生貝 さんしやうがい

小貝浜は、かつては「蚕養浜」といわれ、この浜
一帯からとれる美しい小貝は「蚕生貝」と呼ばれ、
蚕室などに祀って豊蚕のお守りにされた。



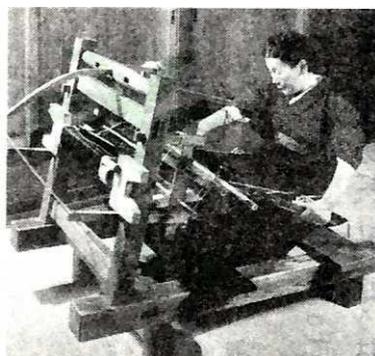
糸繰川

(関城町一下妻市)



小貝川
(蚕飼川)

鬼怒川
(絹川)



結城紬の
機織 (いざり機)

つくばらきシルクロード

常陸国（現茨城県）は古代に養蚕・織物の先進地であった。養蚕や織物に関わる神社や寺が各地に祀られ、養蚕や機業に因む名称の地域や河川が多く存在し、伝説が伝承されていることは、かつてこのあたりが養蚕や機業の地であったことを雄弁に物語っている。また県内に我が国で最初の蚕種本場として一世を風靡した史実がある（↓）ことや、今も古来の技法の流れを汲む紬業が反映していることなどもそれを裏づけている。また「万葉集」に「筑波嶺の新桑繭の衣はあれど君が御衣しあやに着欲しも」と、筑波と桑・繭・衣とをおりこんで詠われており（万葉歌碑、つくばテクノパーク大穂内に所在）、7～8世紀の昔にすでにこのあたりが養蚕の地であり、よい絹織物の産地だったことを証左して意義深い。

文武天皇の大宝3年（703）に、筑波山麓の蚕影神社の近くで蚕種を作り、市場を結城の地に開いたといい、これは日本における蚕種業の最古の記録として知られている。蚕種業は近世中期以降、養蚕業からの分化が進行し、次第に地域的に特産化して発達したが、元禄（18世紀前半）頃におけるその中心地は結城地方であった。260戸余が蚕種業に従事し、すでに分場組織に似た小作養蚕も行われ、広く各地に販売して「結城蚕種本場」の名声をほしいまみにしていた。